

I 調査結果の概要

1 世帯における食品使用量、食品ロス量及び食品ロス率

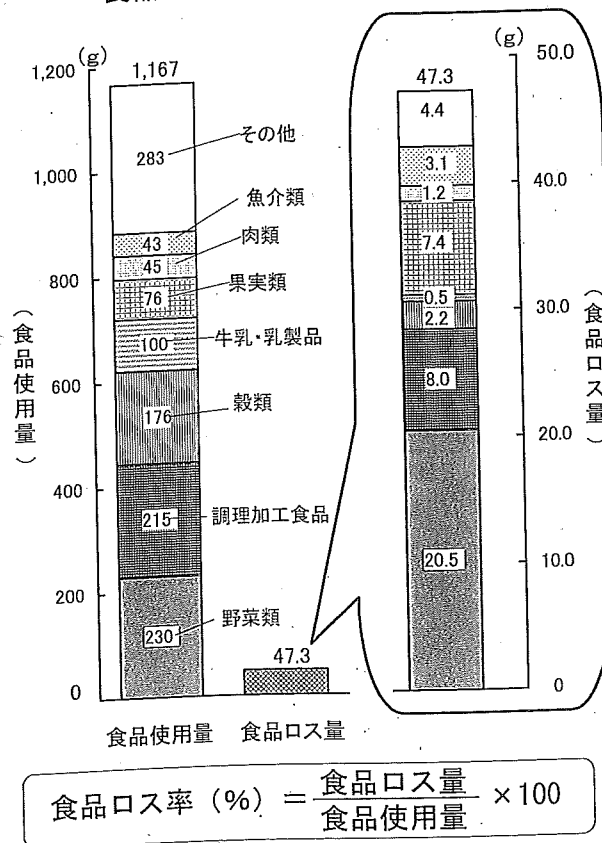
世帯食（世帯において調理・食事したもので、外食、学校給食等を除いたもの。）における平成17年度の1人1日当たりの食品使用量は1,167gであった。

主な食品類別にみると、「野菜類」が230g（全体の19.7%）と最も多く、次いで「調理加工食品」が215g（同18.5%）、「穀類」が176g（同15.1%）となっている。

また、世帯食における1人1日当たりの食品ロス量（純食料のうち廃棄や食べ残されたもの。）は47.3gであり、主な食品類別にみると、「野菜類」が20.5g（全体の43.2%）と最も多く、次いで「調理加工食品」が8.0g（同17.0%）、「果実類」が7.4g（同15.6%）となっている。

この結果、平成17年度の食品ロス率は4.1%となった。

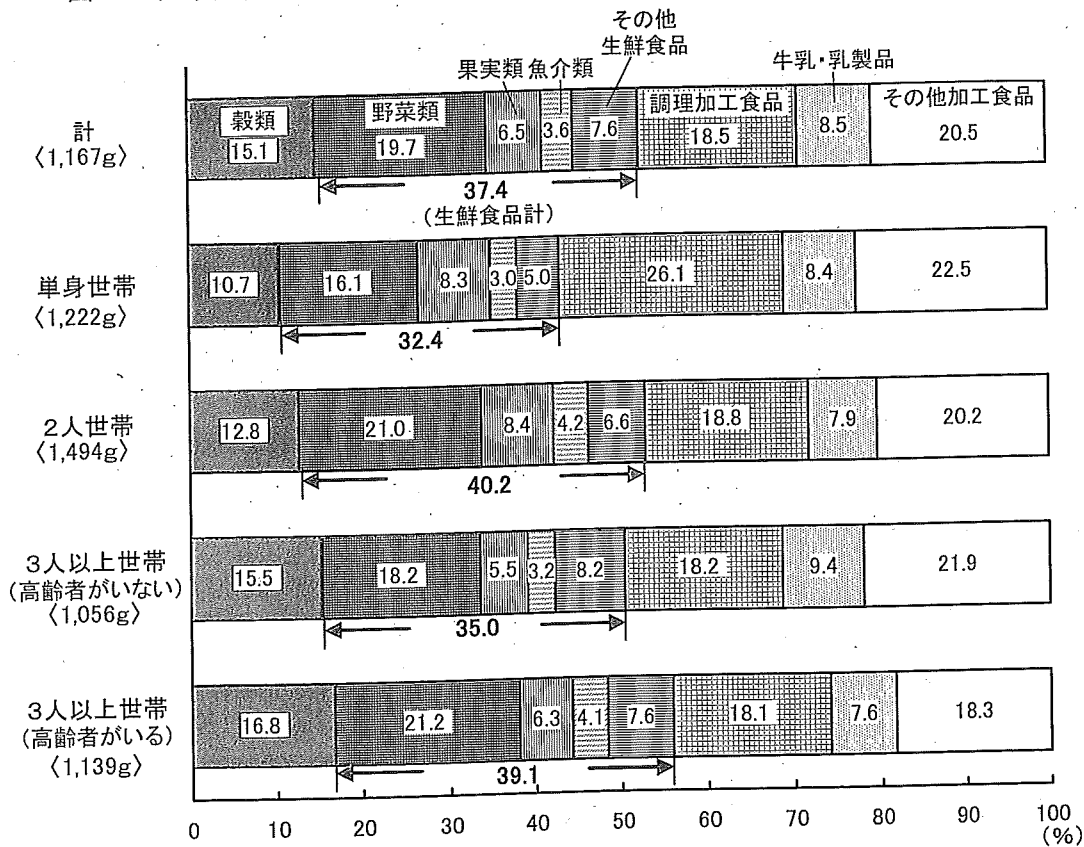
図1 主な食品類別の食品使用量及び食品ロス量（世帯食1人1日当たり）



(1) 世帯員構成別にみた食品使用量及び食品使用量割合

世帯食における1人1日当たりの食品使用量を世帯員構成別にみると、「2人世帯」が1,494gと最も多く、次いで「単身世帯」が1,222g、「高齢者がいる3人以上世帯」が1,139g、「高齢者がいない3人以上世帯」が1,056gとなっている。

図2 世帯員構成別の食品使用量割合（世帯食1人1日当たり）



注:1 く)は食品使用量を示している。

2 「その他生鮮食品」とは、「豆類」、「きのこ類」、「肉類」、「卵類」、「生鮮海藻類」をいう。

3 「その他加工食品」とは、「でんぷん」、「砂糖類」、「油脂類」、「調味料類」、「菓子類」、「飲料類」をいう。

「2人世帯」で食品使用量が多いのは、中・高齢の1世代世帯の占める割合が高いため、外食の割合が低く、自宅で食事を摂ることが多いことによる。「高齢者がいない3人以上世帯」で食品使用量が少ないのは、外に働きに出たり、学校に行く世帯員が多いため自宅で食事を摂ることが少ないことによる。

また、食品使用量割合をみると、単身世帯では「調理加工食品」、2人世帯では「生鮮食品」^(注)、高齢者がいる3人以上世帯では「穀類」が、他の世帯員構成に比べそれぞれ高くなっている。

単身世帯では、果実類を除くすべての生鮮食品の使用量割合が、他の世帯員構成に比べて低く、即席米飯類等の「調理加工食品」が26.1%と最も高いことから、できるだけ調理を必要としない簡便な食品で済ませている傾向がうかがえる。

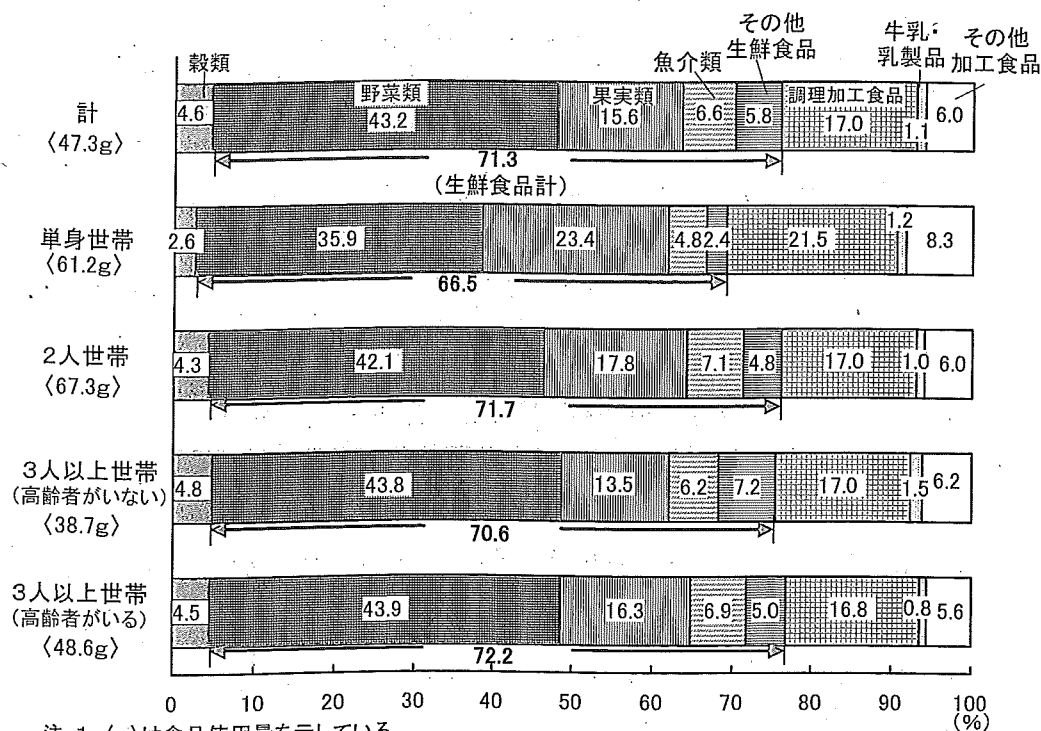
(注) ここでいう「生鮮食品」とは、本調査の食品類上「野菜類」、「果実類」、「魚介類」、「豆類」、「きのこ類」、「肉類」、「卵類」、「生鮮海藻類」に分類されるものをいう。

(2) 世帯員構成別の食品ロス量及び食品ロス量割合

世帯食における1人1日当たりの食品ロス量を世帯員構成別にみると、「2人世帯」が67.3gと最も多く、次いで「単身世帯」が61.2g、「高齢者がいる3人以上世帯」が48.6g、「高齢者がいない3人以上世帯」が38.7gとなっている。

また、主な食品類別に食品ロス量割合をみると、単身世帯では「調理加工食品」が他の世帯員構成に比べて高く、2人世帯及び3人以上世帯ではいずれも「生鮮食品」が70%以上となっている。

図3 世帯員構成別の食品ロス量割合（世帯食1人1日当たり）



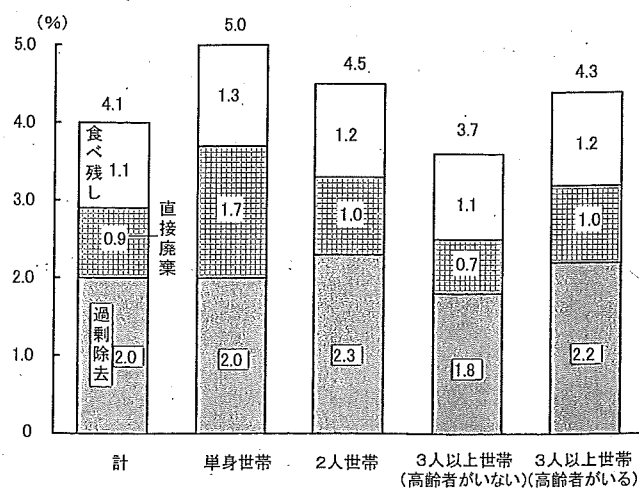
(3) 食品ロス率

世帯食における食品ロス率は4.1%であった。そのうち、「過剰除去」(注1)が2.0%と約半数を占めて最も高くなっており、次いで「食べ残し」が1.1%、「直接廃棄」(注2)が0.9%となっている。

(注1) 「過剰除去」とは、食品の可食部分の除去(大根の皮の厚むきや食肉の脂肪の除去等)をいう。

(注2) 「直接廃棄」とは、賞味期限切れ等で世帯において使用・提供されずに廃棄したものをいう。

図4 世帯員構成別の食品ロス率

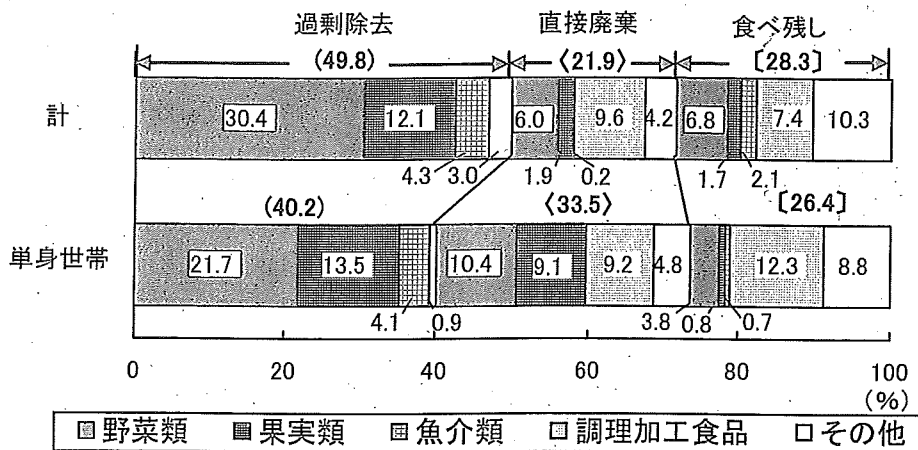


ア 世帯員構成別

世帯員構成別の食品ロス率をみると、「単身世帯」が5.0%と最も高く、次いで「2人世帯」が4.5%、「高齢者がいる3人以上世帯」が4.3%、「高齢者がいない3人以上世帯」が3.7%となっている。

最も高くなっている単身世帯では、野菜類、果実類の直接廃棄及び調理加工食品の食べ残しがロスの発生要因として大きくなっている。

図5 発生要因別の食品ロス量割合（世帯食1人1日当たり）

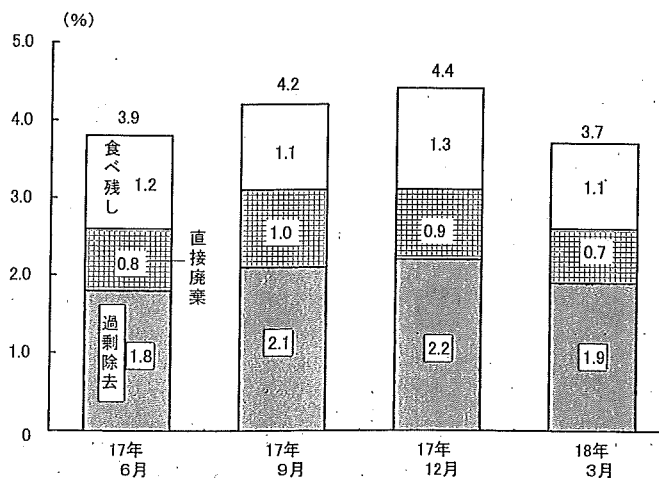


注：図中の数値は全体のロス量に占める各要因別の食品別のロス量の割合を示し（ ）は過剰除去を、〈 〉は直接廃棄を、[]は食べ残し量の割合を示している。

イ 調査時期別

調査時期別の食品ロス率をみると、「17年12月」が4.4%と最も高く、次いで「17年9月」が4.2%、「17年6月」が3.9%、「18年3月」が3.7%となっている。

図6 調査時期別の食品ロス率

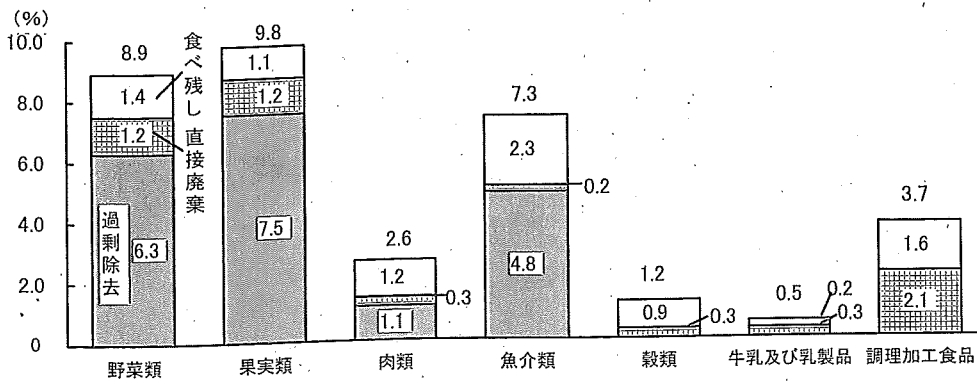


ウ 主な食品類別

主な食品類別の食品ロス率をみると、「果実類」が9.8%と最も高く、次いで「野菜類」が8.9%、「魚介類」が7.3%と過剰除去のロス率の高い生鮮食品で高くなっている。

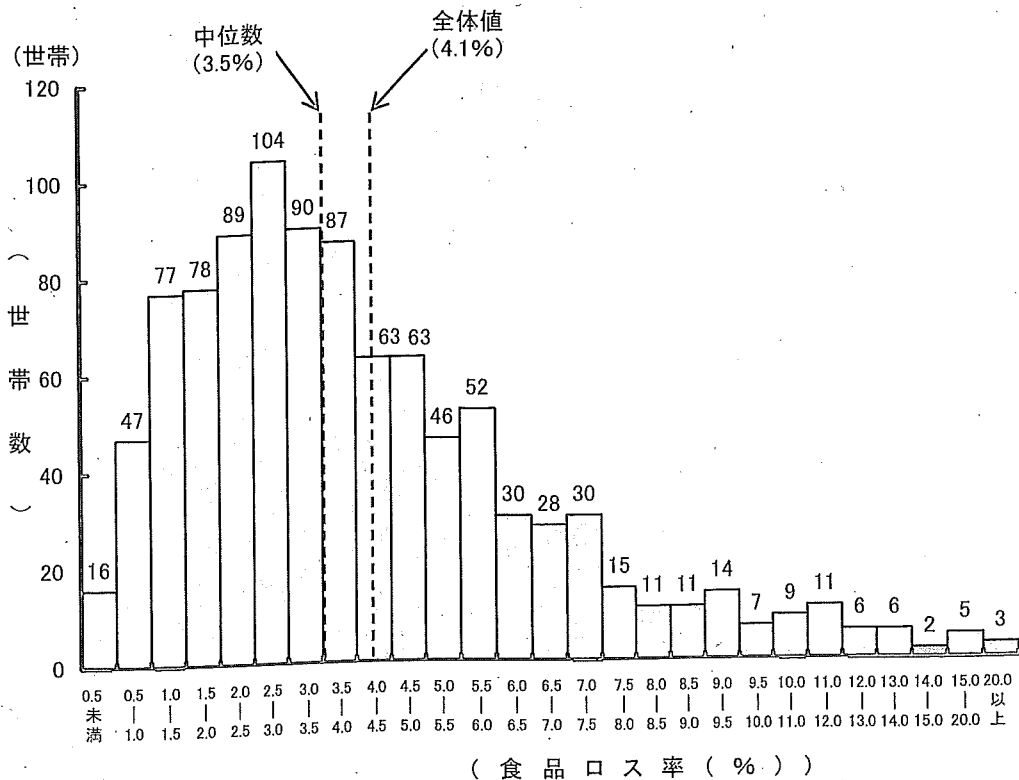
また、「調理加工食品」では直接廃棄（2.1%）が、「魚介類」では食べ残し（2.3%）が他の食品に比べて高くなっている。

図7 主な食品類別の食品ロス率



参考 本年度の食品ロス率別の世帯数分布

本年度の世帯食における食品ロス率は4.1%であるが、食品ロス率別に調査世帯（1,000世帯）の分布をみると、全体の約6割がこれを下回る結果となっており、中位（500番目と501番目の平均値）の世帯の食品ロス率は3.5%となっている。

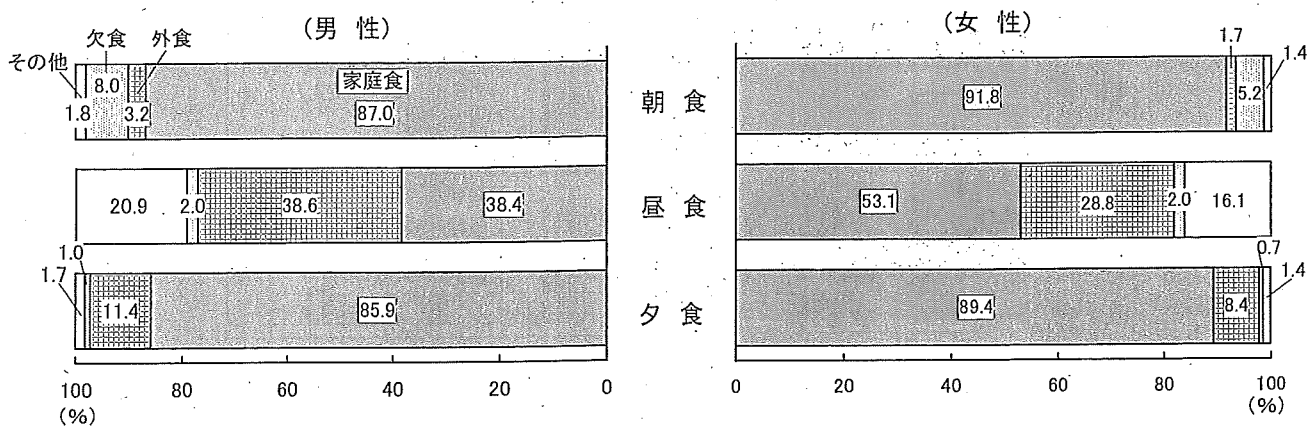


2 世帯における食事の状況

(1) 世帯員の食事状況

世帯員の性別ごとに調査期間1週間における食事状況をみると、朝食及び夕食は「家庭食」（家庭で摂る食事）の割合が男女とも85%以上となっている。また、昼食は朝食や夕食に比べて、「家庭食」の割合が男女ともに低下し、「外食」や「その他」（給食、自家製弁当）が高く、特に、男性の昼食は「外食」（38.6%）と「家庭食」（38.4%）がほぼ同じ割合となっている。

図8 世帯員の食事状況



注: 「家庭食」とは、食事の参加状況のうち、「一緒に食事をした」、「後から食事をした」を合わせたものをいう。

さらに、昼食を世帯員の年齢階層別にみると、15歳未満は、男女ともに「その他」（給食、自家製弁当）が約半数を占めている。また、15歳～60歳は男性では約半数を「外食」（52.1%）が占めており、女性では約半数を「家庭食」（49.3%）が占めている。

図9 昼食時の世帯員の食事状況（世帯員年齢階層別）

